

大学入学前指導を通じたActive Learningの一実践報告

－Jump Start English を通して－

Practice of Active Learning through Pre-Admission Education

－The case of Jump Start English－

奥羽充規

Atsunori OKUBA

キーワード：active learning, remedial education, peer support, pre-admission education

0. はじめに

日本の大学のユニバーサル化という言葉を目にし始めてから久しい。天野(2003)はマーチン・トロウ(1976)が挙げる「ユニバーサル高等教育」像について検討する中で、高校生の大学への進学が一種の義務とみなされ、ますます多くの学生が進学に対する義務感を抱くようになると言及しているが、そのような時代の中で変化するのはその高校生を受け入れる側である大学の経営や教育方針も同様であろう。また、天野(2003)はそのような事態が「大学進学の意味について学生たちの考え方を変化させる」ことにも言及しており、いわゆる大学全入時代がますます一般化するにつれ、各大学側はこれまで以上に自らの大学への進学に対する意味や価値を創出していく必要性に迫られることを示唆している。すなわち、今後、大学は学生にとってより魅力的な価値を研究・教育の双方において見出す必要があると言える。中でも、大きな問題の1つが、学力低下がもたらす問題である。いわゆる学士力と呼ばれる大学生として身につける力が年々低下していることに加え、そもそも大学入学に必要な基礎的学力が満たない学生のためのリメディアル教育という問題が存在している。大学教育においてリメディアル教育という言葉が使われ始めてから四半世紀近く経過し、多くの研究がなされてはいるものの、奥羽(2013)においても言及しているように、「その研究成果に関してはいまだ明確な成果はでない」のが現状である。

松下(2015)は「大学のユニバーサル化」と「学士力、社会人基礎力などさまざまな新しい能力」の要請という背景をもとに登場、普及してきたのがアクティブ・ラーニングであると述べている。松下は「インプットだけの、一方向的で、受動的な講義形式」が主流だった大学授業に引導を渡し、学習者中心のパラダイムへの転換をはかるための牽引役としてアクティブ・ラーニングについて言及しているが、まさに時代の要求に答えるような形で現れた学習スタイルであると言えるだろう。現在のような学力低下がはなはだしい状況下では、いかに学生が自立して能動的に学習するかということが1つの鍵となる。これは従来の授業スタイルでの受け身的な学生の学びだけでは立ち行かないことに対する方策であり、小林(2015)にもある

ように“生徒と先生の新しい授業のカタチ”であるとも考えられている。

本論文では、そのような問題に対処する1つの提案として、四天王寺大学の人文社会学部国際キャリア学科において平成27年度に実施した Jump Start English を紹介する。このプロジェクトは次年度入学予定者のための大学入学前教育として平成27年度に企画・実施されたものであり、ピア・サポーター（大学生）が自らの学びの主体として、授業形式で英語指導にあたるというものである。すなわち、アクティブ・ラーニングとして英語及び授業技術を能動的に学びながらリメディアル教育として実際に高校生に教えるというプロジェクトである。このプロジェクトの実施の在り方について紹介するとともに、このプロジェクトを通して、ピア・サポーターが何を学び、どのような意識を持ったのかについての調査結果を分析し、そこから得られるものを論じる。

1. 大学入学前教育の現状

文部科学省は、大学入学者選抜実施要項¹⁾の中で、「各大学は、入学手続きをとった者に対しては、必要に応じ、これらの者の出身高等学校と協力しつつ、入学までに取り組むべき課題を課すなど、入学後の学習のための準備をあらかじめ講ずることが望ましい」と注意事項に明記している。特に、推薦・AO入試入学者の多くは9月～11月の時期に早くから合格が決まるため、4月時点における一般入試合格者との学習習慣や学力の差などが課題として指摘されているのは事実である。その結果、大学入学前教育自体は15年前ほど前より推薦・AO入試の普及とともに高校と大学の接続として主に学習面においてその解決策として提起されてきたものである。しかしながら、ベネッセ教育総合研究所（2014）の言及にもあるように、推薦・AO入試入学者の割合は、大学入学者の4割強、私立大学入学者の約5割という状況が続いており、課題はますます拡大しているに関わらず、入学前教育の実態は必ずしも明らかではなく、その目的や内容についても一様ではない。

ここでは、主に日本の大学の入学前教育についての実施内容や実施目的、そしてその到達目標等に関する先行研究及び調査を紹介する。本研究において紹介する Jump Start English もまた入学前教育の一環であり、その実施内容や目的に関しても過去の事例を参考にしており、その意義を考察する上で必要となると思われる。

1. 1 大学入学前教育の実施率と実施内容

図1は、ベネッセ教育総合研究所（2014）による「高大接続に関する調査」による入学前教育の入試方式別実施率に関するデータである。2013年11月～12月に実施された調査であり、全国の2,012の大学で得られたものである。この図からわかる通り、推薦入試やAO入試を実施している大学の入学前教育は推薦入試の入学生に対しては、7割弱、AO入試の入学生に対しても8割弱の大学が実施していることがわかる。したがって、ベネッセ教育総合研究所の分析にあるように、これらの入試方式と入学前教育の実施をセットで考えている大学が多いことが

1) 平成28年度大学入学者選抜実施要項p.9より

推測される。次に、図2では入学前教育の内容を紹介している。

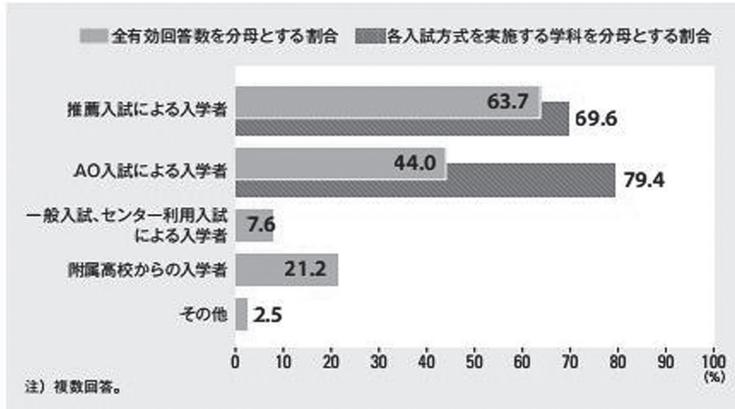


図1 入学前教育の入試方式別実施率

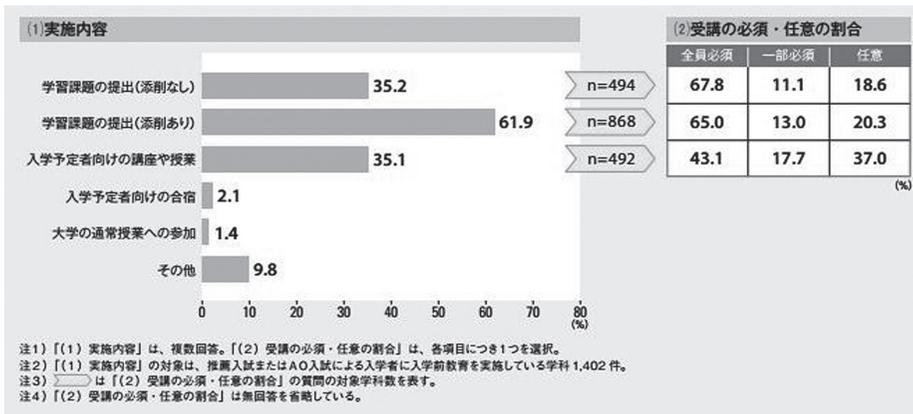


図2 入学前教育の実施内容 (ベネッセ教育総合研究所 (2014))

入学前教育の実施内容で多いのが、学習課題の提出である。これには、添削なしと添削ありのものがあるが、添削ありのものが61.9%とその数は多い。入学予定者向けの集合型講座や授業に関しては35.1%とその実施率は学習課題と比べて低く、遠隔地の入学予定者に対する配慮等もあり、なかなか実施が難しいようである。

次に図3で紹介しているのは、入学前教育で使用する教材に関する調査²⁾である

穂屋下・小野他 (2012) によるこの調査では、「販売されている書籍・プリント教材」が43%、「独自に作成した書籍・プリント教材」が62%と高い数値になっている。販売されている教材と比べて、独自作成した教材を使用する割合が多いことはこの領域の取組にまだまだ信用に値する

2) 穂屋下・小野他 (2012) 「全国の大学対象のアンケート実施とその結果 (2011年度)」『リメディアル教育研究』 Vol.17, no.1, p.7 より

教材や方法論が存在していないことを表している。eラーニング教材も含まれているが、販売されているものが9%、独自に作成されたものが5%とまだまだ低い数値である。

しかしながら、穂屋下・小野等（2012）の調査において、入学前教育の学習成果の確認については、およそ46%の大学が「確認していない」と答えており、確認している方法にしても「聞き取り調査」が20%、「学習前後のプレースメントテスト」が17%となっており、その学習成果に対する大学からの期待は感じられるものではない。

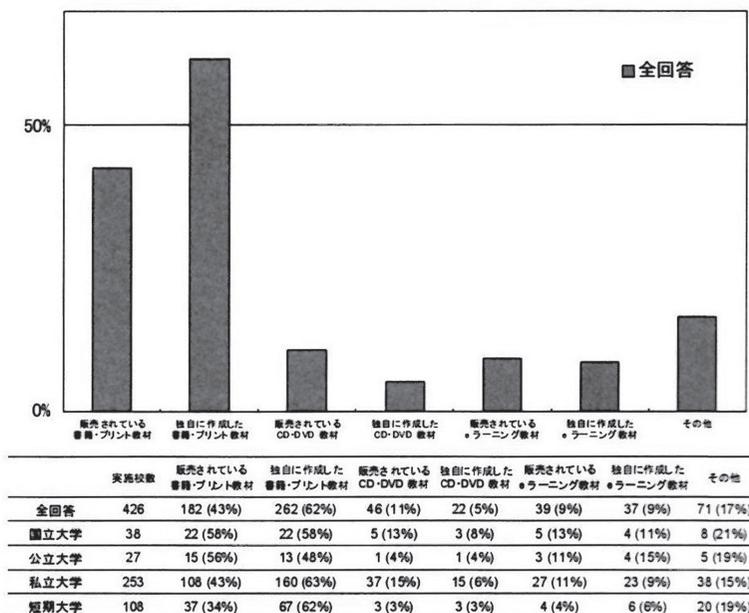


図3 入学前教育に使用した教材（穂屋下・小野他（2012）より）

1. 2 大学入学前教育の実施目的

穂屋下・小野等（2012）は大学入学前教育の実施目的として、以下の5つを回答選択肢として調査している。

1. 「AOや推薦で入学してくる学生の学力維持・向上」…84%
2. 「大学での専門教育の導入準備として」…54%
3. 「高校生として必要な基礎学力の確認・補習」…48%
4. 「高校からの要請」…6%
5. 「その他」…7% （複数回答あり）

回答選択肢の「AOや推薦で入学してくる学生の学力維持・向上」が他の選択肢と比べて極

めて高い数字を出していることから、やはり一般入試で入学してくる学生との差を少しでも埋めるための取組としてとらえている大学が多いことは一目瞭然である。また、次に数値の高い「大学での専門教育の導入準備として」の項目は下の図4のベネッセ（2014）の調査の(1)ねらいの項目と比較すると多少高い数値となっているが、その効果が得られる注目すべき項目として言及されている。また、「その他」の項目としては「大学入学までのモチベーション維持」、「学習意欲および学習習慣の動機づけ」、「入学予定者相互の連携強化」、「入学前の不安や疑問をいちちやく解消、大学生生活の目的の明確化」などがある。中でも、「入学予定者相互の連携強化」の項目は図4の「友だちづくりの機会の提供」の項目とつながっており、実施している大学の割合に比べてその効果は極めて高いものとなっている。

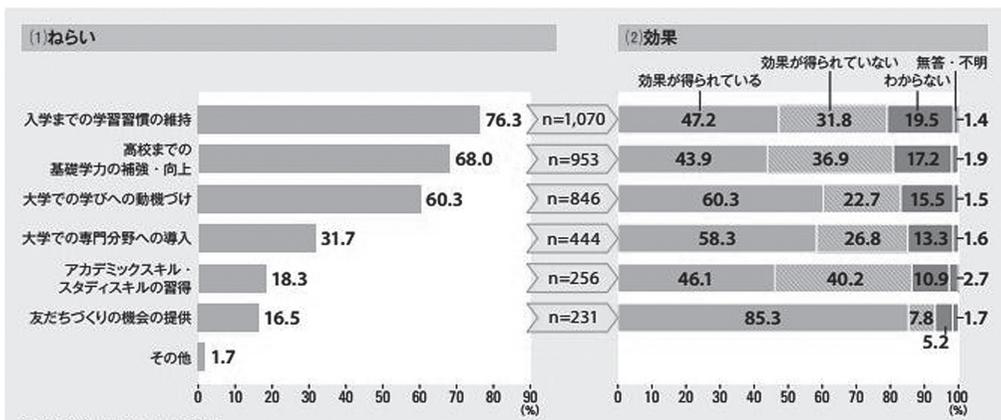


図4 入学前教育のねらいと効果（ベネッセ教育総合研究所（2014））

ここで、問題となるのは実施している大学の割合の多い「AOや推薦で入学してくる学生の学力維持・向上」や「高校生として必要な基礎学力の確認・補習」の効果の有効的割合が半数に満たないことである。それが必要であることはその実施している大学の多さからも明確であるが、効果が得られるためにはそれぞれの大学が何らかの方策を立てる必要があることを示唆しているといえる。

1. 3 大学入学前教育の到達目標

永井・綾野他（2012）は大学入学前英語教育の到達目標設定と設定した到達目標に適した教材についてのあり方についての提案を行っているが、その前提として「大学生の英語力の低下という理由以外にも、入学者選抜における評価尺度の多元化・複数化という文教施策の元、同一の受け入れ単位内であっても学生の英語力には大きな開きがあり、学部・学科が入学時に要求する英語力に到達していない学生が一定数存在する現状がある。」としている。加えて、入学までに到達すべき明確な水準、その水準が依って立つ統一的な尺度が大学入試センター試験等の入学者選抜試験以外存在しないケースがほとんどであり、結果として入学前英語教育の内容は教材も含めて何らかの統一的で明確な基準に基づくものではなく、担当教員の独自の判断

に依らざるを得ない現状があると言及する。

永井・綾野他（2012）の研究では、その目標設定および教育内容についての検討の中で、従来多く存在した中等教育のやり直しではない大学にふさわしい入学前教育のあり方について検討し、その到達目標のあり方としてCEFRの考えを取り入れている。すなわち、ヨーロッパ圏において言語運用能力を評価する尺度であるCEFRに基づく6レベルによる言語運用能力の記述を参考にして、大学入学前教育の対象となる学生の英語力の記述（読解力の記述）を検討している。しかしながら、その課題の教材の提示方法や課題に関するチェックリストの作成などの検討、実際の教材の作成など今後の課題は多い。いまだユニバーサルな教材作成に至ったものが存在しないのが現状であろう。しかしながら、各大学においても独自の到達目標を作成し、それに基づいた教材および課題を課すことはそれを学習する学生にとっても、わかりやすい動機づけとなり、またプレースメントテスト等によるクラス分けのわかりやすい指標にもなるであろう。

2. ピア・サポートによる教育効果とアクティブ・ラーニング

本研究における目的の1つとして、学生による学生の学習支援であるピア・サポートという形を取りながらそのピア・サポーターとして学生自らが学習することの効果进行调查するということがある。もちろん、その学習効果または教育効果は時に結果論としてとらえることもできるが、本研究では清水・山田（2014）の言及する「ピア・サポーターに期待される教育効果」という視点を考慮に入れた上で *Jump Start English* を通した実践研究を行う。したがって、ここではまずはピア・サポートの現状としての教育効果についての先行研究を紹介するとともに、それを実施するための方法論の1つとしてアクティブ・ラーニングについて言及する。次章において *Jump Start English* の具体的な実践例の導入プロセスや方法論を説明するが、そのアクティブ・ラーニングとピア・サポートの両立こそが *Jump Start English* を特徴づけるもっとも重要な鍵となるのである。

2. 1 ピア・サポートによる教育効果

ピア・サポートは2000年頃から日本の大学において実践されてきた、学生による学生に対する支援のことである。清水・山田（2014）においても言及しているように、学生を支援する学生は“ピア・サポーター”あるいは“ピア・チューター”とも呼ばれる。またSA（学生・アシスタント）と呼ばれることもある。厳密には、サポーターとチューターではその役割は異なるが、谷川・石毛（2014）が述べているように日本においては、学習支援、学習相談ともピア・サポーターという場合が多い。したがって、本稿においても主に“ピア・サポート”、“ピア・サポーター”という用語を使用している。

清水・山田（2014）によると、ピア・サポートによる教育効果は2種類存在する。すなわち、サポートを受ける学生に期待される効果とピア・サポーターに期待される効果である。まず、サポートを受ける学生に期待される効果としては、サポート前の課題をクリアすることができるということがある。加えて、ピア・サポーターとの関わりが、他の学生や大人との関係性を

良好にすることにつながる。また、新入生を対象とするピア・サポートに関しては新入生が大学生活に馴染み、他者とのつながりの形成や履修対応による課題の解消などが期待されるのである。

ピア・サポーターに期待される教育効果として、清水・山田（2014）は次の5つを挙げている。

- ① 教えることにより学ぶ。ある特定知識の成長
- ② コミュニケーション能力の向上
- ③ リーダーシップ能力の養成
- ④ 実践力の向上
- ⑤ サポーター自身の心理的発達の促進、人間的成長や精神的な落ち着き

これらの効果を得るためには、清水・山田が言及しているように正規教育・正課外の諸活動に参加することを通じたモチベーションの向上と学習に取り組む積極的な態度を相互関係の中で高めることが重要である。しかしながら、その過程においてサポーター学生は後輩に対するロールモデルとなり得るのである。

また、石毛（2014）はピア・サポーターの存在のメリットを述べる中で、以下のようなピア・サポーターのメリットについて言及している。

1. 対人援助のためのスキルや態度を学ぶことができる。
2. 自立学習や能動的な学習習慣を身につけることができる。
3. 社会人基礎力を向上させ、社会に出たとき役立てることができる。

石毛はメリットという言葉でその効果を紹介しているが、ここで紹介されているのは主に対人コミュニケーション能力と自立学習の習慣といった、いわゆる社会人基礎力として必須な能力について言及している。

2. 2 アクティブ・ラーニングとは何か

アクティブ・ラーニングは、北米で1990年代初頭に提唱されたことは周知の事実である。溝上（2015）³⁾の言及するところでは、講義脱却と学習と成長パラダイムにおける大学教育における学習論であり、溝上（2014）はアクティブ・ラーニング（AL）を次のように定義している。

3) 溝上慎一（2015）「大学教育から初頭中等教育へと降りてきたアクティブ・ラーニング」

『アクティブ・ラーニングとは何か』金子書房より

一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

この定義は極めて広義の能動的な学習を意味しており、受動的な学習を乗り越えるという形である意味あらゆる能動的な学習を認める内容となっている。また、以下には文部科学省が平成24年度に出した『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）』（以下、質的転換答申）の用語集における定義では次のように説明されている。

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によっても取り入れられる。

先の定義に比べて、より具体的な学習方法がこの定義の中では説明されている。文科省の定義を端的に述べると、講義一辺倒の授業を脱却して、能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法であり、いわゆる学士力として社会において求められる様々な汎用能力を育成することがその目的であるとしている。その中では学習を個人から他者や集団との関わりへと拡張していく点がポイントとなっている。

松下（2015）では Bornwell&Eison（1991）を紹介しながらアクティブ・ラーニングの特徴を次のように挙げている。

- (a) 学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること
- (b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- (c) 学生は高次の思考（分析、統合、評価）に関わっていること
- (d) 学生は活動（例：読む、議論する、書く）に関与していること
- (e) 学生が自分自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること

また、このような特徴に加え、アクティブ・ラーニングとは、「行為すること、行為についてフレクションすることを通じて学ぶこと」と Bornwell&Eison (1991)の定義を説明している。

ここで紹介した3つの定義のいずれにしても、情報の伝達としての受動的な学習ではなく、学生スキルの育成といった能動的な学習が焦点化されており、溝上（2015）の言及する認知プロセスの外化を期待したものであると言える。

3. Jump Start English の実施例

本章では、四天王寺大学人文社会学部国際キャリア学科における Jump Start English についてその実践例を紹介する。このプロジェクトは平成27年度に始まった、国際キャリア学科の大学入学前指導の一環として実施されたものであり、大学生による来年度（平成28年度）入学予定の高校生の指導を行うというものである。具体的には、AO入試に合格し、早い時期から大学入学を決めた高校生に、英語の補習授業をピア・サポーター（大学生）が実施するというものである。端的に言うならば、大学生のアクティブ・ラーニングと大学入学前指導の一体化、そして英語リメディアル教育との融合の実践が行われているのである。また、企画的な特徴として、いわゆるプロジェクト・ベースド・ラーニング（PBL）としての要素が実施側のピア・サポーターや教員には求められる。

3. 1 Jump Start English の実施目的

すでに言及したように、Jump Start English は大学生のアクティブ・ラーニングかつ高校生の大学入学前指導であるため、その目的は両者を含むものである。それは次の3つである。

1. 高等学校までに学習した英文法・英語コミュニケーションの復習および英語力アップ
2. 入学予定者相互の連携作り、先輩・後輩関係を形成することによる入学後の不安軽減
3. ピア・サポーター（大学生）のアクティブ・ラーニングによる英文法や英語コミュニケーションに関する主体的な学びの形成

3つの目的の内、最初の2項目は大学入学予定者に関する目的である。1つ目の項目については、AO入試に合格した高校生向けに広告を配布し、その広告内において宣伝している。2つ目に関しては、プロジェクトに参加した高校生が主にコミュニケーション活動に参加する過程などで実施されている。3つ目に関しては、ピア・サポーターとして参加している大学生に期待する目的であり、本研究における主な調査項目である。

3. 2 Jump Start English の実施手順

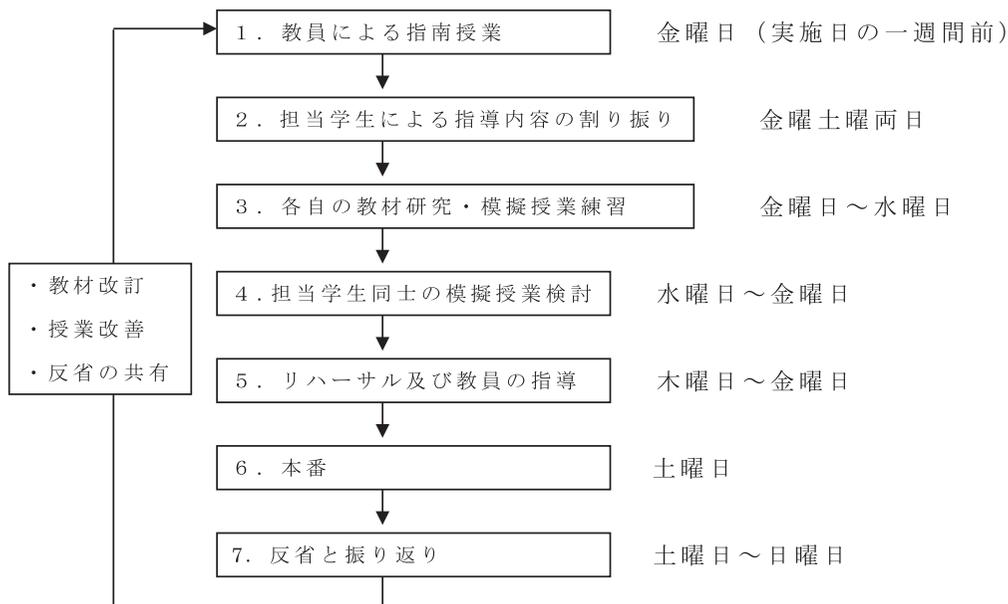
このプロジェクトの対象となる高校生は7月から8月にかけて実施されるAO入試試験の合格者が対象となるため、その実施時期は10月～12月にかけての3か月間である。

以下に、Jump Start English の実施に関する手順を紹介する。

1. 実施講座：入学前教育講座「Jump Start English」
2. 受講場所：四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス
3. 支援学生：国際キャリア学科 2年生（5名）および3年生（8名）の有志
4. 指導内容：17：00～：英文法、18：00～：英語コミュニケーション（英語会話）
5. 使用教材：担当教員作成のオリジナル教材
6. 指導対象：国際キャリア学科 AO入試合格者（33名）
7. 講座期間：平成27年度10月～12月 全10回 土曜日 17時～19時

No.	Date	文法	Communication
1	10月10日	be動詞と一般動詞	Introductions-the basics
2	10月17日	文の要素と5文型(1)	Asking/giving personal information
3	10月24日	5文型(2)	Talking about likes and dislikes
4	10月31日	基本時制	Talking about preferences
5	11月7日	進行形と完了形	Talking about habits and routines
6	11月14日	助動詞	Asking about people routines
7	11月21日	受動態	Describing everyday activities
8	11月28日	不定詞	Asking about future activities
9	12月5日	動名詞	Talking about likes and dislikes
10	12月12日	分詞	Talking about preferences

8. 実施手順（Jump Start English の週間サイクル）



10月から毎週土曜日の17時より実施される Jump Start English であるが、毎週の開催であるので、その実施は1週間単位で繰り返されることになる。基本的に教員は授業の指南や教授技術指導は行っても、ピア・サポーター間の協力体制に関する指示や、授業担当者の練習の指示、課題の提示などはしない。教師の役割は基本的にアドバイザーであり、サポーターの支援役である。そのようにして、上の手順にあるように、1つのサイクルを3か月にわたって繰り返す。以下にその過程を順に追って説明する。

1. まずは教員の指南授業から始まる。本番に使用する教材の準備およびその教材についての指導を担当教員が行う。Jump Start English は英文法と英語コミュニケーションの2時間の指導が前半と後半に分かれて実施されるので、英文法は日本人教員、英語コミュニケーションはネイティブ教員がそれぞれその指南を担当する。

2. 教員による指南授業の後、英文法および英語コミュニケーションの担当者がそれぞれ自分の指導担当箇所を相談の上決定する。人数の割り振りは英文法、英語コミュニケーションともに3名～4名である。今回のピア・サポーターの3年生は全員が英語の教員を希望する学生であったが、2年生はまだその希望について定かではない学生がほとんどであった。また、この段階においては教員希望の3年生も未だ教育実習等には行っておらず、1人の学生が1時間の授業を全部担当するには負担が大きいと考えた。したがって、英文法・英語コミュニケーションの授業はそれぞれ1時間であるが、それを人数で分けるので各担当時間は15分～20分程度である。もちろん、その他の時間も授業者の授業支援や高校生の学習支援に回っている。

3. 各担当者が決まった後は、各自が使用する教材の教材研究を行った上で、模擬授業の練習を行う。学生は教員の指南授業をスマートフォン等を利用して録画・録音しており、繰り返し再生することによりまずは自分が受けた授業のコピー再生の練習をする。加えて、英文法などでは、各自の理解が不十分な内容に関しては自分自身でより深く勉強し、授業者としての知識や技術の研鑽を行う。

4. 各自の準備ができた後、英文法・英語コミュニケーションそれぞれの担当学生が大学の授業時間の合間等を利用して集まり、時間を測りながら模擬授業を行う。時間の管理、声の強弱、姿勢や目線、説明内容の正誤、授業内活動の指示のわかりやすさ、言葉の言い回し、予想される質問等に対する対応等の練習等を行う。授業は英文法と英語コミュニケーションとあるので、英語コミュニケーションのほうはAll English による授業展開の練習、発音や指示英語の正確さの確認を含めて行う。

5. 自分たちで1時間実施できるレベルまで練習した後、本番前のリハーサルを実施し、担当教員の指導を受ける。木曜日から金曜日に実施するが、実際のところ金曜日の実施（本番前日）がほとんどであった。

6. 本番当日は、会場におよそ2時間前から集合し、最後のリハーサル及び確認、そして配布教材や資料の準備を行う。また、高校生が会場まで迷わないように道案内担当のピア・サポーター役を配置する。

7. 本番終了後、反省会を実施し、教員からの全体を通してのコメント、そして一人一人への指導を行ったあと各自がそれぞれの反省を述べ、皆で共有する。授業の内容、高校生の反応、授業の手ごたえ、良かった点、悪かった点等の振り返りをお互いに共有する。当日に授業担当ではなく参加していない学生との情報共有のためライン等のSNSを利用した情報共有グループラインを作成し、学生間で常に自分たちの反省や次回の振り返りなどを共有するようにする。また、次週までに各担当者は教員から配布されたりフレクシオンシートを記入し、提出する。

上記の1～7の流れは当然のことながら一巡だけするものではなく、繰り返しそのサイクルを巡り、前回の反省をリフレクトしながら改善を繰り返す。

米川 (2015)⁴⁾ はプロジェクト・ベースド・ラーニングとしてのアクティブ・ラーニングは図5にあるようなドーナツ状になっている作業を軸上の工程で何度も繰り返し実行しながら、課題完了に向けてプロジェクトを進めると言及している。Jump Start English においても同様に常に授業内容のデザイン、教材運用や改訂、授業の振り返り、次回への改善点をピア・サポーターと教員が協力して模索・検討を繰り返し、そのプロジェクトの完成に向けて取り組んだのである。

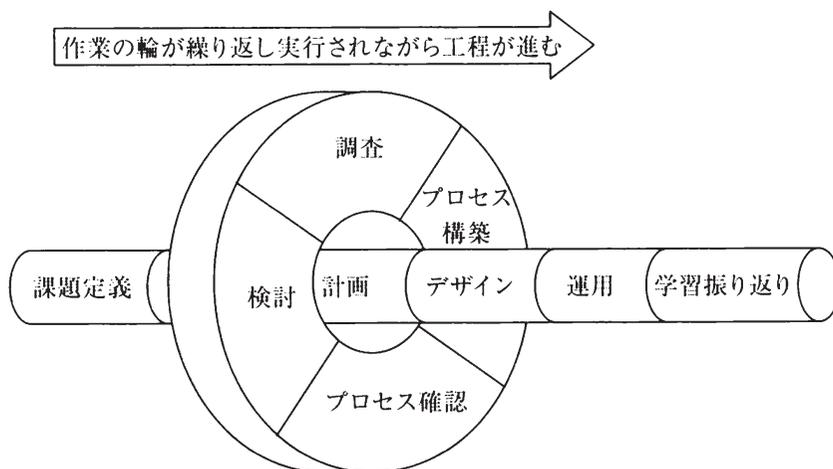


図5 プロジェクト・ベースド・ラーニングの実行イメージ (米川 (2015))

4) 米川雅士 (2015) 「大学でのプロジェクト・ベースド・ラーニング」
『アクティブ・ラーニングとは何か』金子書房より

3. 3 Jump Start English の使用教材およびリフレクションシート

ここでは、実際に使用した英文法の教材及び英語コミュニケーションの教材、そして学生の振り返りに使用したりリフレクションシートを紹介する。先ほどの手順のように、まずはこれらの教材を使用して教員がピア・サポーターに授業を行い、その指南授業を叩き台としてサポーターが自分の授業を作り上げるのである。

<英文法教材>

Unit 1 be 動詞と一般動詞

【Unit 1 で学ぶべきこと】

be 動詞と一般動詞の違いについて今一度確認してみよう。主語や時制によって変わる動詞の形や発音について再認識するとともに、いくつかの動詞の原形・3 単元・過去形・過去分詞形についてはその変化を覚えることは必要である。

1. be 動詞と一般動詞の文の違いを理解しよう。

(1) My brother **is** a college student.

He **isn't (is not)** a police officer.

Is he handsome?

主語

=====
be 動詞

状態、性質、名前
(), ()

→(1)の文は「誰」が「～である」というように、主語の状態、性質、様子などを説明する文となっている。否定文の時には be 動詞+not、疑問文の際には be 動詞を文頭に出すのは原則。

	1 人称	2 人称	3 人称
単数	I - am	you - are	he[<u>she, it</u>] - is
複数	we - are	you - are	they - are

(2) They **go** to school even on Saturdays.

They **don't (do not)** go to school on Sundays.

Do they go to school during summer vacation?

→(2)の文は「誰」が「どうする」というように、「主語が～を行う」という be 動詞ではない動詞（一般動詞）を使った文となっている。否定文の時には、don't (do not)、疑問文の際には Do を前に出すのは原則。ただし、主語による動詞の屈折、do の変化は要注意! ☆否定・疑問文では動詞の形は () ですよ。



For example,
(例えば)

(3) Mr. Abe **lives** in a very big mansion in Tokyo today.

He **doesn't (does not)** live in the house in Yamaguchi now.

Does he usually eat dinner in his house?

2. 「be 動詞」と「一般動詞」の現在・過去・過去分詞の形を確認しておこう。

- ① A-B-B 型 (過去形と過去分詞形が同じもの)
- ② A-B-C 型 (全部形が違うもの)
- ③ A-B-A 型 (原形と過去分詞形が同じもの)
- ④ A-A-A 型 (全部同形のもの)

keep-kept-kept
begin-began-begun
come-came-come
cut-cut-cut

be 動詞の形
原形…be
現在形…上の表
過去形…was, were
過去分詞形…been

☆次の動詞変化表を完成させてみよう。

原形	3 単現	過去形	過去分詞形
1.	meets		
2. study		studied	
3.			sent
4. play			
5.	says		
6. run			
7.		came	
8.			sung
9.		kept	
10.	stops		
11.			gone
12.		spoke	
13. write			
14.			put
15.	reads		

3. 「be 動詞」と「一般動詞」が同時に存在している文に要注意。

それぞれ別々でしか使われない場合には判断もしやすいが、両方が使用されている場合の用法の違いについて注意しよう。以下の文で、間違った文はどれか？

- (1) The dogs are running in the park.
- (2) The two glasses were broke the table.
- (3) Professor Jones is always goes to college by bus.
- (4) The ability to speak English is very important today.
- (5) The air from the mountain is be a little cold.
- (6) The cars was export to China.
- (7) I have been sleeping on the bed since this morning.
- (8) My brother was take a shower when I called him.

【練習問題 1】 次の文の()に be 動詞の適切な形を入れなさい。

- (1) I () from England.
- (2) We () happy now..
- (3) “() your brother hungry now?” “Yes, he ().”
- (4) Bill and I () good friends of mine.
- (5) “() you late for school yesterday?” “Yes, I ().”
- (6) “() Ken sick last week?” “No, he ().”
- (7) There () four people in my family.

<英語コミュニケーション教材>

Name: _____

19

Making questions with "like" and "dislike"

Put in the missing words

Yes / No questions

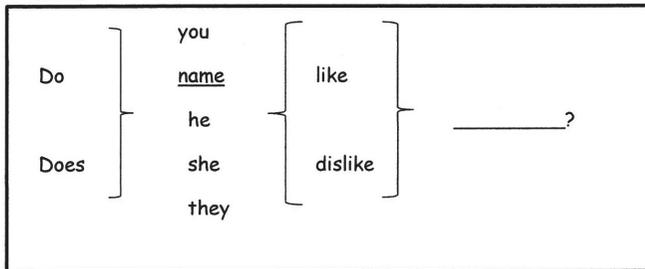
● Q: _____ like hip-hop?

A: Yes, I do.

● Q: _____ your sister _____ shirako?

A: No, she _____.

Rule:



Wh- questions:

● Q: _____ you like?

A: I like sleeping.

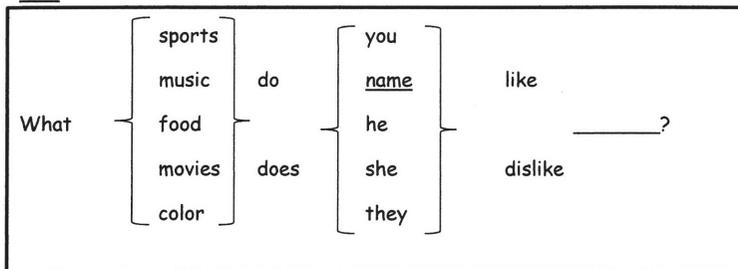
● Q: _____ your mother like?

A: She _____ surfing.

● Q: What _____ like?

● A: I like basketball.

Rule



Now Practice!

A

Use the chart. Complete the sentences.

	Loves 😊	Likes 😊	Doesn't like 😞	Hates 😡
 Chuck	beef pizza hamburgers	beans onions sushi	noodles soup	vegetables rice
 Dora	vegetables rice soup	chicken beans sushi	beef noodles onions	pizza hamburgers

1. Chuck loves hamburgers, but Dora _____ them.
2. Dora _____ onions, but Chuck _____ them.
3. Chuck and Dora _____ noodles, but they _____ sushi.
4. A _____ Dora _____ pizza?
B No, she _____ it.
5. A _____ Chuck _____ vegetables?
B Yes, he _____. But Dora _____ them.

B

PAIR WORK Write three more questions about Chuck and Dora. Then ask and answer the questions.

1. Do Chuck and Dora like beef? 3. _____
2. _____ 4. _____

C

Complete the questions with Do or Does. Then answer the question with information about you.

1. Do you like sushi? Yes, I do.
2. _____ most children like spicy food? _____
3. _____ your school serve food? _____
4. _____ your friends like French fries? _____
5. _____ you work in a restaurant? _____
6. _____ your father drink coffee? _____

D

Complete the questions. Use the verbs in the box.

1. Where does your teacher live?
2. What kinds of food _____ your favorite restaurant _____?
3. What kinds of food _____ you _____ in the morning?
4. Where _____ you _____ for pizza?

go
like
live
serve

<リフレクションシート>

JUMP START ENGLISH

Reflection Sheet

○場所：阿倍野ハルカス サテライトキャンパス

○日付：平成 年 月 日 曜日

○氏名：

○担当講座（内容）：

○担当講座を通じた感想・コメント

○担当講座を通して気付いたこと・学んだこと（今後の改善点等）

○担当講座中、気になったことや学生について

○本日の講座を担当して、自分の中での点数は 100 点中何点？

/100

4. Jump Start English に関するピア・サポーターの意識調査

Jump Start English の終了後に、今回の振り返りとしてピア・サポーターの学生たちにアンケートを実施した。ここでは、その意識調査の結果について紹介するとともに、その分析を行う。使用したのは以下のアンケートである。

<p>Jump Start English 第1期振り返り</p> <p>氏名： _____</p> <p>1：強く思う 2：思う 3：どちらでもない 4：思わない 5：まったく思わない</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Jump Start English に参加して良かった。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 2. 毎回の準備にきちんと時間をかけて取り組むことができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 3. 当日の授業で全力を尽くすことができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 4. Jump Start English を通して文法力を改善することができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 5. Jump Start English を通して英語コミュニケーション力を改善することができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 6. 高校生と積極的にかかわることができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 7. 高校生とよい関係を築くことができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 8. Jump Start English に参加することで、自分の言語学習や教授学習を頑張ることができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 9. 他のSAメンバーと協力して活動することができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 10. 他のSAメンバーと良い関係を築くことができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 11. 人前で授業を行うことに自信を持つことができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 12. 教師という職業により興味・関心をもった。(実際になるかどうかに関わらず) 1・・・2・・・3・・・4・・・5 13. Jump Start English を通して達成感を感じる事ができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 14. Jump Start English を通して、自分に自信を持つことができた。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 15. この企画は今後も続けるべきだと思う。 1・・・2・・・3・・・4・・・5 	<p>○Jump Start English に参加した感想、コメント</p> <p>○今回の Jump Start English に参加した自分自身の反省</p> <p>○今後、Jump Start English を実施するにあたっての大学側への要望等</p> <p>○Jump Start English に参加することのメリットは何と思うか?</p> <p>○今回の Jump Start English の問題点は何か。</p> <p>○最後に、来年また実施するにあたっての抱負。</p>
---	--

次に、アンケートから得られた各質問項目ごとの回答結果を紹介する。

1：強く思う 2：思う 3：どちらでもない 4：思わない 5：まったく思わない

	質問内容	1	2	3	4	5
1	Jump Start English に参加して良かった。	12(92%)	1(8%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
2	毎回の準備にきちんと時間をかけて取り組むことができた。	2(15%)	6(46%)	4(30%)	1(8%)	0(0%)
3	当日の授業で全力を尽くすことができた。	3(23%)	9(69%)	0(0%)	1(8%)	0(0%)
4	Jump Start English を通して文法力を改善することができた。	9(69%)	4(30%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
5	Jump Start English を通して英語コミュニケーション力を改善することができた。	6(46%)	4(30%)	3(23%)	0(0%)	0(0%)
6	高校生と積極的にかかわることができた。	6(46%)	5(38%)	1(8%)	1(8%)	0(0%)
7	高校生とよい関係を築くことができた。	4(30%)	6(46%)	3(23%)	0(0%)	0(0%)
8	Jump Start English に参加することで、自分の言語学習や教授学習を頑張ることができた。	7(54%)	5(38%)	1(8%)	0(0%)	0(0%)
9	他のSAメンバーと協力して活動することができた。	8(62%)	5(38%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
10	他のSAメンバーと良い関係を築くことができた。	8(62%)	3(23%)	2(15%)	0(0%)	0(0%)
11	人前で授業を行うことに自信を持つことができた。	3(23%)	8(62%)	1(8%)	1(8%)	0(0%)
12	教師という職業により興味・関心をもった。(実際になるかどうかに関わらず)	10(77%)	3(23%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
13	Jump Start English を通して達成感を感じる事ができた。	6(46%)	5(38%)	2(15%)	0(0%)	0(0%)
14	Jump Start English を通して、自分に自信を持つことができた。	3(23%)	6(46%)	3(23%)	1(8%)	0(0%)
15	この企画は今後も続けるべきだと思う。	12(92%)	1(8%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)

表1. Jump Start English 振り返りアンケート結果

表1は今回のJump Start Englishの後、1週間後に実施した意識調査の結果である。項目1と15から分かるように、このプロジェクトへ参加した結果、ほぼ全員が参加して良かったと強く感じたようである。このアンケートは記名式で実施していることから、傾向としては好意的な反応になりがちであることも考えられたが、学生は毎週の振り返りや反省会の中で、自分自身を含めこのプロジェクトのあり方について良い点と悪い点について率直な意見を述べることを意識的に行っており、従ってこの結果は学生の率直な気持ちを表したものと判断できる。毎回の準備に時間をかけて取り組めたかどうかについては、実際に自分が費やした時間の過多ではなく、その時間が授業を成功させるのに実際に十分だったかどうかを各自が考えており、その結果回答が散在していると思われる。当日の授業に関しては、皆が全力を尽くしており、1名がそうではないと答えているが、自分の中でうまくやれなかったことに自信を失った結果である。また、4・5番の2つの項目にあるJump Start Englishを実施することによるアクティブ・ラーニングの中で大学生自身が英文法や英語コミュニケーションについて学び、その知識や力を改善することができたかの質問については、皆が概ね高い数値を出している。英語コミュニケーションのほう若干低いのは、なかなかAll Englishの授業に対応できなかったことがその原因と思われる。しかしながら、言語学習や言語教授法についての学びや取組に関しては皆が意識的に努力したことがわかる。

高校生との関わりに関しての6・7番の項目であるが、この2項目で3年生と2年生の間でその結果に差が生じた。3年生は多くのメンバーが高校生と積極的に関わり、良い関係を築くことができたかと答えていたが、2年生は5人中3人前後が「どちらでもない」と答えており、この企画に対する心構えや取り組む姿勢に差が見られた。やはり、3年生の教職希望者が多いことがその取組みへの意識の高さに表れている。

SA（ここではピア・サポーターと同義）同士の協力や関係性についての項目であるが、関係性に関しては「どちらでもない」と答えた学生が2名ほどいるが、実際に本番の為に組んだグループ編成において学年交流があまりなかった学生にそのように答えた傾向が見られた。しかしながら、回数を重ねるごとに学年を越えたつながりの頻度は高くなっており、そのことに喜びを感じる2年生も存在したようである。

Jump Start Englishの結果、「人前で授業を行うことに自信がついたか」と「教師という職業に興味・関心をもったか」という項目については、8割以上の学生が授業について自信をつけていたが、まだ少数ながらそうではない学生も存在しており、全10回という回数や、特に2年生の中の教職の学習や意識をあまり持っていない学生にはなかなかハードルが高いことがわかる。しかしながら、「教師という職業」に関しての興味・関心を77%の学生が強く持ったと答えており、学生の中に「教師とは何か」というような意識の芽生えを与えることができたようである。

最後に、Jump Start Englishという企画を通して、達成感や自分に対して自信を得られたかの項目についてはそれぞれ7割から8割前後の学生が得られたようであるが、達成感のほうでは2名（15%）、自信を得られたかの項目では31%の学生が否定的な回答をしており、メンバー全員がそのパフォーマンスに対して必ずしも満足いく結果ではなかったことがわかる。

以下は、記述による学生の意識調査結果である。

○ Jump Start English に参加した感想、コメント

- ・ 教師になりたいという気持ちがとても強くなりました。 (2年生)
- ・ 教えることの楽しさ、達成感を味わうことができました。 (2年生)
- ・ 授業をすることの大変さを経験することができて良かった。 (2年生)
- ・ 教師として「準備する」ことの大切さを感じました。
- ・ 3年生の先輩と仲良くなれてうれしいです。 (2年生)
- ・ 実際に生徒相手に前で教えるのは初めてだったので、良い経験になった。 (3年生)
- ・ 何回か授業を重ねることで自信がついてきました。
- ・ SA同士が協力しての授業作りは、他ではできないので、参加できてよかった。
- ・ 授業が終わってからの高校生からの「楽しかった」「学校よりもわかりやすい」というコメントをいただくことで、やる気がわいて自信につながった。

○ 今回の Jump Start English に参加した自分自身の反省

- ・ 消極的な性格が授業時に外にでてしまった。自分が楽しいと思いつながりながら取り組めなかったことが反省点です。 (2年生)
- ・ 途中から練習回数が少なくなったことです。 (2年生)
- ・ 一人で授業をする担当範囲は少ないのに、生徒にちゃんと伝わっている不安で自信が持てず、前で小さい声で話してしまったことです。 (2年生)
- ・ 自分の指示が適切ではないことが何度もあったこと。
- ・ 本番前に先生に教わり、そのまま指導すればよいという考え方をしていましたが、それだけではダメだと思い知りました。そのための準備を自分なりにしなければならいことを学びました。 (3年生)
- ・ 先生が作った教材をしっかりと理解できていなかったこと。
- ・ 生徒が少なくなってきた時に、自分自身のやる気がなくなることがあったこと。

コメント及び感想からは、「達成感」と「自信」を得ることができたことが分かる。また、2年生と3年生の学年間の交流ができ、先輩と親しくなったことを喜ぶ記述があった。さらに、教えるという行為を通して教師になりたいという気持ちを抱く学生もでてくる。反省の記述からは自分の「消極的な」態度を振り返り反省する内容や、自分の指示の伝わらない様子とうの振り返り、なぜうまくいかないかを自分の中でじっくり考えた記述がみられる。学生は「達成感」や「自信」といったさらに自分を磨く動機付けを得るとともに、Bornwell&Eison (1991) の言

及するところの自分自身の態度や価値観の探求を行っているのである。

○ **Jump Start English** に参加することのメリットは何と思うか？

- ・前に立つために、勉強して、理解できていないところを見直して、やっていることすべてが一番自分のためになっていることがメリットです。
- ・高校生にとっては、英語の復習ができ、大学生になるという自覚も持てて、高校卒業のメリハリがついたことです。
- ・勉強することの大切さを知ってもらえたと思います。
- ・個別ではなく、複数の生徒を相手に授業をする機会を得られること。
- ・ステップ by ステップで授業の練習ができること。
- ・教員志望の学生にとっては、とても役にたつ経験が得られる。
- ・自分自身の英語力向上。
- ・高校生の学生さんの学力向上を実際に見ることができる。
- ・縦のつながりができたので、高校生が入学してからも交流ができると思う。
- ・実際に高校生に授業を行うことができること。
- ・日々の練習の積み重ねで、生徒を楽しませることへも力を入れることができた。

○ 今回の **Jump Start English** の問題点は何か。

- ・休んでから次に参加する学生がスムーズに activity に参加できなかったこと。
- ・高校生の意見を聞く機会と話したりする機会が少なかった。
- ・生徒が宿題をやってきていなかった時の対応や、宿題でわからないところがあった時の対応。
- ・2年生が3年生に頼りすぎていた点。
- ・2年生と3年生の空き時間が中々合わず、通して練習する時間がうまくとれなかった。
- ・生徒の数が問題だと思う。毎回、最初の数（18名）ほどは来てほしいと思う。
- ・本当に心から生徒にわかってほしい、楽しんでほしいと思っているSAが何人いるのか。本当に教えたいと思っているかどうかを最初のSA募集の段階ではっきりさせる必要があると思う。

メリットとデメリットに関する質問項目であるが、高校生にとってのメリットの1つとして **Jump Start English** が高校卒業のメリハリになるとの考え方は興味深い。また、高校生とピア・サポーターとの交流をそのメリットとして挙げ、関係をきちんと構築することで大学入学後の

交流、ひいては不安解消の効果があることが記述されている。また、ピア・サポーター自らが勉強しながら教えるという行為を行っているため、勉強することの大切さをより実感しており、その大切さを高校生に伝えたいと考えていることが分かる。デメリットとして、高校生と大学生の両者が望むような交流の時間が得られなかったことが同時に記述された。

○最後に、来年また実施するにあたっての抱負。

- ・スピーキングも文法もどちらもまずは自分が楽しんで授業を行いたい。
- ・自信をもってわかりやすい授業ができるように頑張りたいです。
- ・もっと、生徒に寄り添って教えます。
- ・私たちが緊張して、それが表情に出てしまうと高校生にも伝染してしまうので、楽しいという雰囲気を伝染させたいです。
- ・高校生の学生がなるべくたくさん来てくれるように、達成感を味わって帰ってもらえるような授業をすること。
- ・教えることに責任をもち、初心に戻って練習時間をたくさん作って、高校生に満足してもらえるように頑張りたいです。

ここでも「自信」と「達成感」の2つのキーワードが記述された。ピア・サポーターのみならず高校生にも味わってもらいたいとの気持ちが伝わる。いわゆる対人援助の態度を自然と身につけているのである。生徒に寄り添いたいというコメントもその表れであろう。それを実践するためのコミュニケーション能力の必要性を実感し、そのスキルを磨くことでより人間的成長がみられることは容易に想像できる。

Bornwell&Eison (1991) はアクティブ・ラーニングの定義を「行為すること、行為についてリフレクションすることを通じて学ぶこと」と説明しているが、Jump Start English を通してピア・サポーターの学生はまさにそのことを実践している。彼らは指導すべき内容（英文法・英語コミュニケーション）について教材を通して学び、そしてそれを教えることを学び、実際に教え指導し、高校生の反応を見ながら指導しかつ学び、つねに学びを自分たちの行為のリフレクションを通して行っているのである。それは石毛（2014）で言及しているところの「対人援助のためのスキルや態度」、「自立学習や能動的学習習慣」「社会人基礎力の向上」に当てはまっており、アクティブ・ラーニングの結果として理想的な効果をあげたといっても過言ではないと考えられる。

5. 終わりに

本論文では、大学入学前指導におけるアクティブ・ラーニングの実践方法として四天王寺大学人文社会学部の国際キャリア学科の Jump Start English を紹介している。Jump Start English は大学入学前指導という大学による新入生指導の企画でありながら、ピア・サポーターである国

際キャリア学科の2年生と3年生がAO入試に合格した高校生を授業形式で指導する。すなわちアクティブ・ラーニングとして大学入学前指導に取り組むのである。また、加えてそこには英語リメディアル教育の側面もあり、1つの企画で複数の要素を満たすプロジェクトとなっているのである。

そこで、本論文ではまず大学入学前教育の現状について説明するとともに、その内容や教材について先行研究を紹介した。また、全国の大学で行われている入学前教育の目的を知ることで、Jump Start English というプロジェクトの目的を明確にした。加えて、アクティブ・ラーニングについてその定義、教育効果について紹介し、大学入学前教育とアクティブ・ラーニングが共存することができる根拠を示した。

次に、本研究で実践している Jump Start English の実施目的や手順、実際に使用した教材を紹介して、どのようなプロセスで実施したのかを説明し、最後にその結果として、ピア・サポーターである学生はどのような意識を持つにいたったのかをアンケート調査をもとにその結果を説明した。

Bornwell&Eison (1991) のアクティブ・ラーニングの定義と同様に、アンケート結果からも学生は「行為すること、行為についてリフレクションすることを通じて学ぶこと」を実践しており、その結果「自信」や「達成感」といったキーワードをもとに対人援助の態度を育てることが分かった。今回の実践では、3か月の期間で計10回の実施であったが、今後のこの企画を継続することで今後また多くの学生の成長がみられるであろうことは想像に難くはない。

本研究では、Jump Start English のピア・サポーター側から見た実践のプロセスを中心にそのプロジェクトを紹介し、ピア・サポーターの意識結果について述べてきた。今後はピア・サポーターの指導対象たる高校生の意識及び学力の変化の有無にも研究の矛先を向けたいと考える。そうすることで、より一層、このアクティブ・ラーニングの効果はリフレクションとして高まることになるのである。また、Jump Start English は第2期として、推薦入試に合格した学生も加えてその後も実施している。その成果がどのように表れているのか、次の課題としたい。

6. 参考文献

- ・ Bornwell, C.C.,&Eison, J.A. (1991) Active learning: Creating excitement in the classroom. ASHE-ERIC Higher Education Report No.1
- ・ 天野郁夫 (2003) 『日本の高等教育システム』、東京大学出版会
- ・ 石毛弓 (2014) 「学習支援におけるピアチューターの存在意義」、『リメディアル教育研究』、Vol.9,no.2,40-46
- ・ 奥羽充規・福元広二 「大学英語リメディアル教育再考」、『鳥取大学地域学論集』 Vol.9, no.3,105-122
- ・ 梶田叡一 (2015) 『アクティブ・ラーニングとは何か』 金子書房
- ・ 清田洋一 (2010) 「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」、『リメディアル教育研究』 Vol.5,no.1,37-43
- ・ 小林昭文 (2015) 『アクティブ・ラーニング入門』 産業能率大学出版部
- ・ 清水栄子・山田剛史 (2014) 「高等教育機関におけるピア・サポートの現状と課題」、『リメディアル教育研究』 Vol.9,no.2,8-15

- ・中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－」（答申）
- ・永井典子・綾野誠紀他（2012）「大学入学前英語教育の到達目標設定および教材に関する提案」『リメディアル教育研究』 Vol.7,no.2,52-58
- ・穂屋下・小野他（2012）「全国の大学対象のアンケート実施とその結果（2011年度）」『リメディアル教育研究』 Vol.7,no.1,p.3-16
- ・ベネッセ教育総合研究所（2014）『VIEW21 大学版』 Vol.4 Winter
- ・松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』 勁草書房
- ・溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂
- ・文部科学省（2015）「平成28年度大学入学者選抜実施要項について」（通知）